

病理検査室ミーティングを活用した業務改善

～全員参加型の改善活動～

◎水口 聖哉¹⁾、田尻 菜月¹⁾、都竹 遥¹⁾、鮎岡 加奈¹⁾、江末 綾子¹⁾、大西 博人¹⁾、新谷 慶幸¹⁾
石川県立中央病院¹⁾

当院では病理医を含めて病理検査室内で週1回のミーティングを行っている。その中で、業務改善に繋がると思うような提案をしてもらい、スタッフ間で議論した上で改善効果が認められる場合には実際の業務に反映させている。一回のミーティングでは、一人の担当者が発案し、病理検査室内のスタッフ全員が発言できる機会を設けている。提案内容に制限を設けず、日頃感じている疑問や問題点など些細なことでも自由に発言できるよう心掛けている。本活動は昨年より続けており、開始当初は業務削減や効率化に関する提案が多かったが、最近では品質向上や医療安全に関する提案も増えてきた印象がある。

具体例を挙げると、当院では薄切した免疫染色の標本を翌日の朝に染色するという運用を行っていたが、近年の免疫染色標本枚数や項目数の増加により、自動免疫染色装置を一日に2回稼働させなければならない日が多く、病理医への提出が遅れる検体が多かった。そこで、薄切当日の夕方に準備ができた標本について染色を行う運用を開始したところ、翌日の朝には染色が完了し、大きな時間削減と効率化を図ることができた。

また、医療安全に関する提案として、当院では病理医が切出しを行う生検検体について、不要な用紙の上に切出し後の生検検体を載せて技師へ渡す運用を行っていたが、用紙上の検体は不安定で検体紛失のリスクが大きかった。そのため、トレーの上に検体を載せた用紙を置く運用に変更したが、トレー自体が不安定で検体紛失や検体の転がりは依然として生じやすい状況であった。そこで、トレーを安定したものにすることで、リスクを低減させることが可能となった。

日々行っている業務とは、“当たり前だから”や“前からやっているから”といった理由で、その非効率さやリスクについて気づかないことがしばしばあると考えられる。スタッフ全員から自由に意見を言うことで、他の人が考えつかないような改善点がみつかることがある。また、意外にも提案者が考えている改善点や疑問点などが他の人も同様に考えていた、感じていたというような事例もあり、自由に発言する場を設けることの重要性を改めて感じた。何気ない疑問や普段抱えている小さな問題点などを言いやすい環境づくりをすることで、思わぬ視点から発想が得られ、業務改善に繋がると考えられる。